



広大な畑に一陣の疾風が駆けていく。

波のように広がる草木のざわめきは清々しく、汗ばんだ体には心地よかった。

前髪やらシャツを巻き上げながら通り抜けた風波は、湿った海風の中に初夏の匂いを含んでいる。

吹き抜ける風に身を任せて、踊るように揺れているトマト達は、まだ青々しており収穫には早い。

後一ヶ月も経てば、赤く立派なトマトが熟す。

それを楽しみにしながらホースを持ち直したスペインは、畑の水やりを続行させた。

日に日に日差しが強くなる中、夏がすぐ近くまで来ているのが分かる。

夏は、沢山の祭りが控えている。

その準備で慌ただしいが楽しみも重なり、何事も例年通りだった。

日課の水やりを終える頃には、お天道様は真上に近くなる。

昼食の献立を悩みながら水道を止めると、それまで水音で遮断されていた音が耳元に届く。

木々のざわめきや鳥の声に交じって、屋敷内で鳴り響いている音は、すぐに正体が分かった。

「あ、電話、鳴っとるっ？」

すぐに音の正体に気付いたものの、取りに行くにはそれなりに距離がある。

昔から何度も農作業中に水没させてきた携帯は、いつしか家でお留守番させるようになった。

そして、今は鳴っているのは家電のようだった。

広大な畑は家の裏手に広がっており、玄関や勝手口を通って電話の元へ行くには、若干遠回りになる。

鳴りやまない音に急かされながら、無頓着に服の裾やズボンで手を拭いながら駆け足になっていく。

そして、開けっ放しの窓枠に手を掛けると、掛け声一つでよじ登っていく。

「よっ、と」

手慣れた仕草で窓枠に片膝を立てると、そのまま腕を伸ばして受話器を引っ掴んだ。

「はいはい、お待っとうさん」

僅かに弾んだ息を抑えつつ電話に出れば、電話口の向こうからよく知った声が聞こえてくる。

長電話になりそうな相手に、電話本体も掴み上げると軽くコードを引いていく。

そして、窓枠に背中を預けたスペインは、膝の上に電話本体を乗せると、器用に窓枠に座り込んだ。

聞き慣れた小言を適当に聞き流しながら、体制を整え

終わると、のんびりした口調で返していく。

「水やりしとったねんつて〜」

昔馴染みとのやり取りは、何百年経っても変わらず、それが心地よくて、小さく微笑んだ。

目まぐるしく変わる世界情勢に翻弄されつつも、自分の本質はそうそう変わる事もない。

のんびりと相槌を打っている間に、電話の向こうでは本題に切り替わっていた。

「へ〜！そくなんや、・・うんうん、ええやん！」

適当に話を合わせていたが、話が進むにつれ、徐々に雲行きが怪しくなっていく。

そして、嫌な予感的中したように、厄介な話に移り変わった。

「えっ？・・ああ・・まあ、探せばあるんとちゃう？・・探せば、やケドな・・」

面倒だと言いたげに言葉を濁すスペインに、電話口からは申し訳なげな声で続けられた。

「貸すのはええケド、今忙しいの知つとるやろ〜！・・俺が探すんかいなあ・・」

時間を食いそうな話に、落胆のあまり頭を抱えなくなる。

グチグチと文句を並べるスペインを他所に、電話の向こうからは、開き直った声に押し進められていく。

面倒を押し付けられ、苦々しいため息が零れ落ちるばかりだった。

「そら、準備中やけど、もろ分かったつて、探す、探すよつて、何か美味しいもん作つて〜や」

約束やでと続ける声に、安堵の吐息混じりに頷く様子に、少し気分が持ち直る。

「ハイハイ、そんなら、次の会議で・・え？はははっ、ええつて、何とかなるつて！」

重くなりかけていた空気が、軽快な笑い声で晴れ渡っていく。

その後、終始和やかな談笑で話を終えると、ゆっくりと受話器を置いた。

そして、大きな伸びをしたスペインは、電話を元の場所に戻してから、外側に飛び降りた。

小さな嘆息をもらしながら、今度はちゃんと勝手口から家の中に戻ってくる。

そして、リビングをぐるりと見渡しながら呟いた。

「まずは鍵や・・どこへしまったっけなあ・・」
面倒ごとはさっさと片付けてしまいたいが、目的地に行くには鍵が必要だった。

しかしながら、その鍵は長らく目にした覚えがない。普段から大切な物をしまっている場所に当たりを付けてみたが、すぐには見つかった。

最後に入ったのは半世紀ほど前の事で、鍵ごと壊した方が早いような気までしてくる。予想以上に難解になりそうで、困り顔になった頃、不意にググつと鳴り始めた腹音に、一先ず昼休憩を優先することにした。

冷蔵庫の余り物で手早く昼食を済まし、さつさとシエスタに突入する。

数時間後、欠伸混じりで起き上がったスペインは、普段通りに王宮へ向かった。

いつも通り政務をこなしている最中、昼前に増えた用事を思い出すと、仕事の速度を上げていく。

前倒して明日の分も処理を始めた頃、何気なく脳裏を掠めたのは鍵の在り処だった。

まるで、必要になったから自動的に思い出したと言いたげな記憶の欠片に、自分の体ながら薄気味悪い。

しかし、膨大な記憶を保持するのも困難なのは理解しているからこそ、苦笑が滲み出る。

数日分の用件だけ終わらせたスペインは、後はよろしくと言わんばかりに、書類の束を上司の補佐達に押し付けると、家に飛んで帰る。

そして、記憶を頼りにリビングの引き出しを引けば、奥の方に押しやられている鍵を発見した。

手前に入っている物のせいで殆ど隠れていて、余ほど注視しなければ、存在に気付けないのも頷けた。無事に鍵を確保出来た途端、早速とばかりに、目的地に向かっていく。それは、自宅の一番端にある半地下の倉庫だった。

久しぶりに入ることになった倉庫に、少しだけ緊張が走り、鍵を回す手が僅かに震える。

本来なら軽いはずの鍵が、やたらと重く感じる。それでも、意を決したように、大きな深呼吸をしたス

ペインは、ゆっくりと開錠させた。

まるで、止まっていた時間に、新たな空気を吹き込むよ

うに、静かに扉が開かれる。廊下側から伸びる明かりを頼りに、天井にぶら下げたランプに火を入れる。

途端にほんのりオレンジ色に染まった室内は、懐かしい暖かみのある空間に変わっていく。

所狭しと詰め込まれている倉庫は、様々な物が眠っていた。

昔使っていた日用品に始まり、子分達が置いていった物など、懐かしい物も数多くある。しかし、いい思い出の品ばかりではないのも事実だった。

それは、歴代戦火の武器や勲章。果ては現在では失われている事になっている機密文書まで、永遠に日の目を見ないような物まである。この空間にしか存在できない物の数々に、嘆息が零れ落ちる。

無造作に立てかけた斧や、金細工のアンティークなどを一瞥しながら、視線を彷徨わせる。

過去を閉じ込めたような倉庫は、普段は忘れていた記憶の蓋を強引に抉じ開けられた気分になる。

だからこそ、普段から迂闊に近寄らなくなった。それでも、貴重品やら、捨てたくても捨てられない物が散乱しているのも現状だった。

「ココもいつか、掃除して整理せなあかんあ．．」
そのうちと繰り返しながら、半世紀も放置している辺り、実行されるのはどれほど先になるかも分からない。一先ずは用事を終わらせようと、一角に辺りを付けたスペインは、積んだままの箱を軽く引き出した。しかし、物を移動させるだけで、盛大に埃が舞い上が

っていく。
長らく放置していたからこそ、当然の結果ではあったが、大量の埃に思わず咳き込んでしまう。

「げほっ、げほっ！あ、あかん、窓っ」
泡を食いながら窓を全開にさせるものの、半地下のせいで空気の流れは非常に悪い。

この部屋の特徴を、改めて思い出したスペインは、早くも探し物を投げ出したくなった。

予想通り面倒だったと思いつつも、改めて目当ての箱を取り出すと、中身を漁っていく。

半ば記憶だけが頼りの状態ではあったが、それでも目的の物を揃えるには小一時間もあれば十分だった。

そして、埃っぽい部屋からとっとと退出しようとした時、何か固い物が肘を直撃した。

「痛ったあゝ」

思わず悶絶するスペインを他所に、固い物体は派手な音を立てて床を大きく滑っていく。

若干涙目になりつつも、正体を目にした途端、非常に間抜けな声が零れ落ちた。

「あ．．これって．．」

懐かしいと思った次の瞬間、僅かな気まずさを感じたスペインは、静かに拾い上げる。

しばらく迷った末、ズボンに差し込むと、他の荷物と

一緒に倉庫を後にした。
再びしっかりと施錠された倉庫は、再び時間を閉ざしていく。
鍵を元の場所に戻してから、持ち出したものをテーブルに並べる。
そして、埃まみれの姿に肩を竦ませるとシャワールームに消えていった。